

そうまかえる新聞

福島県相馬市・南相馬市の今とこれからを伝えるコミュニティペーパー

「そうま・かえる新聞」
2014年1月 第12号

発行所：そうま・かえる新聞編集部
〒976-0042福島県相馬市中村1丁目13-3モリタミュージック内
配送希望：somakaeru_otodoke@yahoo.co.jp
その他問い合わせ：somakaeru@yahoo.co.jp

子どもたちに明るい未来を手渡すため、
わたしたちは生き方「変える」、
いのちを何よりも大切に「考える」、
まちをグンギン「変える」。



http://soma-kaeru.com/



★そうまなぞなぞ 方言編 その5★
「らっちゃん」ってなーんだ？
例)「いつもお前の部屋はらっちゃんー」

建設から90年を迎えた朝日座



市民文化を支える朝日座

誕生から90年 「まちづくりの中心に」

福島県南相馬市原町区の映画館「朝日座」が、2013年11月、国の登録有形文化財に指定されました。1923年(大正12年)に、芝居小屋兼活動写真館として建てられ、現在、ちょうど90歳。太平洋戦争の戦火を逃れ、昭和の時代は、常に市民の文化の中心にありました。その後、一度閉館しましたが、東日本大震災の地震被害を逃れ、今新たな役割を担うために再び息を吹き返しています。(タカノシンジ/南相馬市)

芝居鑑賞もできた映画館

朝日座は1923年、「旭座」の名で地元の有志により、芝居もできる常設の映画館として建設されました。当時、両方上演できる施設は全国でも最先端。現在のようなイス席はなく升席となっていて、舞台には花道がありました。枝敷もあり、地方回りの芝居が行われ、数多くの無声映画が上映されました。子どもから大人まで大勢の市民が、心躍らせながら役者たちの熱演を目の当たりにし、フィルムを通じて海の向こうの新しい文化を感じていました。

戦後は、映画が市民の娯楽として一層の人気を誇り、

それに合わせるように1952年、映画専門の施設に改築し、名称を「朝日座」に改めました。イス席が設置され、それまであった楽屋や2階の枝敷席は不要とされました。その後、映画全盛期を迎え、芸術性の高い作品を選んで上映していた朝日座は、全国の映画関係者からも一目置かれていたようです。

しかし、ビデオデッキが普及し、レンタルビデオ店の登場で客足が遠のいていきました。1991年5月に、開館70周年記念として「ニュー・シネマ・パラダイス」が上映されましたが、客足は戻らず、この年9月に常設映画館としての朝日座は閉館しました。

「朝日座を楽しむ会」の発足

閉館後「朝日座」では、他市の興行主により年に数回アニメ映画を上映する施設として細々と活用されてきました。そうした中、2008年、市民有志が朝日座の保存や活用を考えようと、「朝日座を楽しむ会」を立ち上げました。閉館から15年以上たち、建物の傷みも目立っていたころでした。同会は朝日座の施設管理をしながら、年に数回の映画上映や寄席、コンサートなどを企画。朝日座は市民の文化を育む施設として再び注目を集め始めました。

少なかつた震災被害

2011年3月、東日本大震災が発生しました。この時、南相馬市原町区で観測された地震は震度6弱。ただ、幸いにも朝日座は、35mmの映写機2台の転倒と外側タイルの一部剥離程度の被害で、大きいダメージはありませんでした。

その直後の福島第1原発の事故で、南相馬市からは多くの市民が避難しました。しかし、同年4月、原発から約25kmの朝日座を含む地域が「緊急時避難準備区域(居住は可能な区域)」に設定されると、避難に疲れた市民が徐々に市内に戻って来るようになりました。

そしてこの年の6月、朝日座を楽しむ会が「復興上映会」を開催。映画の上映にとどまらず、被災した市民同士が再会する場、何より忘れていた「娯楽」を楽しむ場となり、たくさんの市民の笑顔であふれました。



朝日座のスクリーン。昨年12月、「おめでとさん朝日座」が開かれた

「おめでとさん朝日座」に駆けつけた人たち。ロビーでの会話が花が咲いた



再び全国が注目

震災後も継続し続けた朝日座を楽しむ会の活動により、朝日座は再び全国的に注目されるようになります。福島大学の学生は、ボランティアでペンキ塗りをしてきました。ミュージシャンの七尾旅人さんは朝日座で2回ライブを行いました。映画監督の藤井光さんは、朝日座を題材に映画「ASA-HIZA - 朝日座を巡る観客たちの90年の物語 -」を撮影しました。

しかし、何より注目を集めるきっかけになったのは、ふさがれていた壁の向こうや、床下、天井裏などに芝居小屋だったときの造りが、大正時代のまま残っているということがわかったことでした。それまで、ある程度は昔のまま残っている部分があるということは知られていましたが、「朝日座を楽しむ会」で壁や床の一部をはがして徹底的に調べてみたところ、役者の宿泊部屋や舞台装置、枝敷、奈落などが、黒板や火鉢など当時の道具と一緒に現れたのです。

朝日座は近年、一部で雨漏りなどがしていましたが、福島県の補助金と全国からの寄付により2012年に屋根の改修工事を行いました。この時、大正時代から残されていた部屋や造りを保存するため、細かい打ち合わせが何度となく行われ、工事は特別な工法で行われました。

今後も、歴史的価値が非常に高い施設として、保存と活用をしていくため、朝日座は国の登録有形文化財に選ばれたのです。

朝日座で心一つに

「朝日座を楽しむ会」は、2013年12月、「国登録有形文化財決定イベント「おめでとさん朝日座」」を開催しました。イベントには、多くの市民のほか、朝日座に関心を寄せる舞台関係者らが全国から集まりました。朝日座の歴史とこれまでの調査結果が発表され、映画「ASA-HIZA」が上映されました。内部見学会も

行われ、これまで壁などで塞がれて見ることができなかった部屋や舞台装置などが紹介されました。

イベント終了後は、用意されたお茶を飲みながら、昔の思い出や、新たに発見したことなど、参加者が思い思いにロビーで語り合っていました。

朝日座を楽しむ会の小畑環子(けいこ)会長(66)は、「朝日座」は、プロもアマチュアも関係なく、アイデア次第でいろいろなことを表現できる場所。特に地域の人たちに活用してもらって、今後まちづくりの中心になっていけば」と話しています。

福島第1原発の事故によって、福島県では地域が分断されただけではなく、人によっては家族や心までが分断されてしまいました。みんなが集まり、同じものを見て、笑ったり泣いたり、手を取り合ったりする場所が必要とされています。震災で傷ついた市民を癒し、心をつなげる施設として、「朝日座」はこれからも存在し続けます。



ステージ裏に見つかった「楽屋」

そうま × 東京

現在、「そうま・かえる新聞」や福島県相馬市・南相馬市応援プロジェクト「MY LIFE IS MY MESSAGE」には、全国に支えてくれる仲間が広がっています。このコーナーでは、そうした全国からの声を紹介していきます。

「全力で一緒に時間を」

ミュージシャン 大森洋平(東京都在住)

2011年3月11日東日本大震災が起こった。数日後には福島の原発が爆発した。決まっていた九州中国地方のツアーの準備をしながらTVを眺めていた。自分はもちろん、音楽なんて無力だと思った。その年の5月、東京・渋谷で相馬市、南相馬市応援プロジェクト「MY LIFE MY MESSAGE」によるHEATWAVEライブが開かれた。中学の頃から大好きなHEATWAVEのライブの打ち上げで、本当に偶然に相馬のモリタミュージックの森田文彦さんと隣り合わせ、十数年ぶりに再会した。森田さんが、すぐにライブに相馬に呼んでくれた。

それが始まりで、南相馬のそうま・かえる新聞記者、柚原良洋さん、相馬の「フード&バー101」の塩沼義治さん、蒼龍寺の田中俊英さん、南相馬の障がい者施設・自立研修所「えんどう豆」の佐藤定広さん、今やバンドメンバーでもある南相馬の柴田拓也…ほか、大切なたくさんの方々との出会い、たくさん話をしました。現実はまだ何一つ終わってないこと、逆に震災から時が経つにつれて、そのまに生きる人達の

不安や迷いはもっとも複雑に深くなっていることも同時に感じながら。歌い、笑い、あり得ない量の酒を飲み、あらためて振り返るとまだ3年足らずとは到底思えない、濃密な時間。その中で僕ももう一度音楽の素晴らしさを知りました。

いつだって絶望と希望は一緒に歩いていて、そんなこと構わずに日々は転がっていて、それぞれ自分で考えて、一つ一つ選んでいくしかない。きつと答えは出ない。でも行くのだ。諦めないその先に少しはマシな明日があるはずなんだ。

いつも教えてもらってる。全力で、一緒に時間を過ごして、歌いに、飲み、今年も行かせていただきます。

いつも本当にありがとうございます。愛をこめて。



相馬で演奏する大森さん(左)＝越後哲也さん提供

相馬市・南相馬市放射線レベル測定値 (2013年12月28日 単位=マイクロシーベルト/毎時)





限界は決めない。考えるために知り、行動へ

山形・鮭川中の文化祭

山形県鮭川村の同村立鮭川中学校(清水昭校長)で、昨年11月2日、「NO LIMIT!」と題した文化祭が開かれました。鮭川中は全校生徒142人の小さな中学校です。文化祭では、書道などの作品展示をはじめ、東日本大震災をテーマにした演劇上演、被災地の写真の展示などが行われました。さらに、福島県相馬市、南相馬市を応援するプロジェクト「MY LIFE IS MY MESSAGE」を率いるミュージシャン山口洋さん(HEATWAVE)らが参加し、被災地支援がテーマのトークライブ、南相馬市の障がい者施設で構成する「南相馬ファクトリー」のグッズ販売なども盛りだくさんな内容でした。今回、文化祭の企画の中心となった前期生徒会役員の皆さんが震災にあったのは、卒業を間近に控えた小学校6年の時。それから2年半以上が経過した今、鮭川中の皆さんが何を伝えようとしたのかをレポートします。(柚原良洋/南相馬市)

鮭川村は山形新幹線の終着駅がある新庄市から西におよそ車で20分、特別豪雪地帯に指定されている山間部にあります。2014年1月1日現在の人口は、4,746人。決して大きくはない山村です。

きっかけは生徒のメール

文化祭に山口さんが出演したきっかけは、生徒会長の田中こうや君(3年)からの1通のメールでした。「震災から2年が過ぎた時に、同じ東北に在りながら、1つ山を越えれば今もなお、震災・福島第一原子力発電所事故と戦っている人たちがいることを忘れてはいけないと感じ、鮭川中学校生徒会では「つなごろう福島プロジェクト(通称:福島プロジェクト)」を立ち上げました。自分たちに何が出来るのかを考えていた時に知ったのが

熊本県大津北中学校で行われた活動でした。被災地と同じ気持ちにはなることはできないかもしれないけど、同じ東北人として震災、被災地のことを考えれば、被災地に住む人たちの気持ちにもっと近づけるのではないかと。被災地を元気づけるためにも考え、行動を起こしたい。そのために山口さんが現在の活動にこめる思いを知りたいのです。(要約)

このメールを受け、山口さんは鮭川中の文化祭への出演を決めました。

巨大ちぎり絵に故郷

文化祭は、巨大ちぎり絵の披露で開幕しました。ちぎり絵は、相馬市、南相馬市を舞台に毎年繰り広げられる「相馬野馬追」と、鮭川村で毎年8月に行われる

身体に飛び込んで、震災からこれまでの、さまざまな出来事が喉裏に浮かんできます。震災から2年半以上経過し、今なお福地できない人たちの将来に対する不安をぬぐうことさえできず、それも仕方ないことかと半ば諦めの心境であったのに、このままではいけないと気付かせてくれます。

南相馬の缶バッジ販売

校内では学校の授業で手掛けた作品のほか、「福島プロジェクト」として、10月に南相馬市を訪れた同校の柿崎健教諭が編集した南相馬市の写真、生徒が作成した「満月の夕」をモチーフにした絵などが展示されました。南相馬ファクトリーの缶バッジやTシャツの出張販売も行われました。缶バッジは、この文化祭やクラスごとにデザインしたバッジも作られました。生徒や保護者の中には、障がいのある方が、震災・原子力発電所事故により、一度避難した後、避難先では安心して生活することができず、作業所に戻り、今まで通りの生活はできないものの、その中で缶バッジを作るようになったという経緯を初めて知った方も多々あります。

山形・鮭川中の生徒会の皆さんの感想

僕たちの文化祭に「MY LIFE IS MY MESSAGE」の方が来てくださったことはとてもうれしかったです。少しずつ進めてきた「福島プロジェクト」でしたが、みなさんが来てくださったおかげで、テーマの「考える」ということから、活動としての形、それから南相馬市の人たちとのつながりができました。震災が起きてから、被災地のためにしなければならぬことはわかっていても、何もすることができずじまいでした。しかし、今回の文化祭で山口さんと柚原さんと話したところ「考えてくれるだけでも嬉しい」と言われました。直接、被災地のために行動ができないけれど、微力ながらも被災地の方々のことを相手のことを思うということが大切だと感じました。僕にとっては、文化祭は大きな体験でした。この文化祭で築きあげた「つなごろう」というものをいつまでも大切にしたいです。(生徒会長 田中こうや)

生徒の皆さんは、文化祭の当初の目的であった「考える」ために「知る」ことを経て、「南相馬ファクトリー」を応援しよう」と行動を起こしました。バッジの販売に加え、6作業所で構成する南相馬ファクトリーへ、6つの千羽鶴も贈られました。各クラスが温かいメッセージを添えた千羽鶴をつくりました。

このほか、村のイベントでの募金活動なども行い、そうま・かえる新聞、MY LIFE IS MY MESSAGEの活動に役立てて欲しいと、それぞれ募金をしてくれました。

演劇で南相馬の風景

文化祭では、生徒会が企画した全校参加型劇「裸の大將 福島へ行く」が上演されました。脚本は柿崎健教諭が南相馬で実際に見た風景、そうま・かえる新聞のブログによる現地の情報などを基に構成されていました。

語り部の「あなたにとって夢、願いはなんですか」という問いかけに対し、「できるなら、3月11日に戻って、あの日の教室に戻って、床に落ちた自分のシャープペンを持って筆箱にしまっ、あの日の授業の続きを受けたい」と答えるシーンが冒頭にあります。劇中では、

そうま・かえる新聞という存在は大きいものでした。文化祭を行うにあたって、山口さん、柚原さんはじめ、多くの人の協力があったからこそ、一つのものをつくることができたと思っています。また、文化祭や福島プロジェクトを通して個人として思ったことは、ニュースや本で見ていたことだけが現実ではなかったんだと思いました。この福島プロジェクトはこれからも続けることで、一つの形になると思うので、これから大切だと思っています。(副会長 阿部航大)

山口さん、柚原さんの話を聞いて紙を読んだりするのは違いますが被災地にいたからこそその話を生で聞けて、それまで以上に苦しんでいる人がいるということを実感しました。私たちは被災地に行くことができない、行く勇気はなかなかないけれど、被災地で活動する山口さんはやっぱり優しいと思ったし、生で歌を聞くこと被災地の人のように大変な思いは私たちがしていないけれど、元気がなれたし、すごく楽しかった。柚原さんは本当は苦しい思いがあると思うのですが…経験したことなどを話していただけて良かったです。たくさんの写真や動画をブログなどに載せていただいて、被災地の方々に何か思いが伝わったと思います。被災された方々に少しでも私たちの活動や思いを知ってもらって、前に進む勇気になってほしいです。ありがとうございます。(副会長 安彦朱有)



上:阿部航大さん(3年)が書いた全校生徒の言葉をまとめた詩「一瞬の未来」
下:生徒らを前に熱い演奏をする山口洋さん



伝統行事「灯籠流し」、この日上演した演劇でも登場する「満月の夕」がモチーフの月、MY LIFE IS MY MESSAGEのロゴが描かれています。原案を作成した本木葉津実さん(3年)は、「南相馬と鮭川村、それぞれの故郷ならではの温かみがあり、もう一度自分の故郷について考えてほしいという願いを込めてデザインした」と話していました。

続いて、生徒会副会長の阿部航大君(3年)が福島に対する思いや、伝えたいこと、全校生徒の思いを一つにしたいと考え、全校生徒の言葉をまとめた詩「一瞬の未来」を、全校生徒が群読しました。詩の中には文化祭のテーマ「NO LIMIT!」が意味する「終わりを作らない、限界を決めない」という言葉が盛り込まれ、この文化祭での「福島プロジェクト」に対する鮭川中の強い思いが感じられます。群読という手法によって、ダイナミクスを増し、音、言葉だけではなく何か

一瞬の未来

作:阿部航大
あなたには故郷がありますか
僕達の故郷は今ここに
僕達はここに生きている
しかし同じ空の下に
あのときのまま止まった場所がある
その中で
君は空は
確かな風は
やさしい雨は
人に見えない牙をむく
その牙は僕達人間が作ったものであり
今もその牙におびえ続けている
一瞬で故郷を 愛する人を 夢を 未来を
失った人がいる
見つかるはずのないものを
取り戻せない過去を
探し続ける
常に見つかるものは
忘れられない思い出と
恋しさと
恋しむ
しかし僕は考える
どんなに大きな困難でも
人は今まで
強い心と考える脳がある限り
何度でも立ち上がり
夢を 希望を捨てなかつた
だから今の僕達がある
過去の人にできたなら僕達にもできるはず
どんなに枯れた花も
どんなにしおれた花も
未来に生きる種を残し
種に愛を 希望を託す
僕達人間も
どんなに辛くても
どんなに苦しくても
未来に生きる子供を残し
子供に愛を 希望を託す
しかしそれを安全に収めるには
安全な未来が必要だ
未来は未来の人が作るのではない
未来は僕達の手で作るのだ
どんなに悩んでも
そんなに絶望しても
必ずまた朝は来る
閉けない夜はない
今はかすかな光しか見えないかもしれない
しかし一歩一歩歩んでいる今
その先に明るい未来が必ず待っている
終わりを作らない
限界を決めない
ほんの小さなことから
少しずつ少しずつ
積み上げている今
その先に誰も見たことのない未来が
必ず待っている

震災・原子力発電所事故の影響でまったく手入れがされていない水田や、立ち入りができなかったため、まだまだ片付いていない南相馬の現在の映像を折り込みながら、矢口啓悟君(3年)が扮する裸の大將が見た南相馬が描かれています。

震災直後の南相馬の病院、震災時から小高駅の自転車置き場に放置されている通学用自転車、駅にとまったままの電車、2012年4月に避難指示解除準備区域になり、立ち入りは可能だけれども、夕方になると家々の電気もまばらで、人の声はせず、風の音だけが響く小高区の夕刻の景色、不自然なくらいに増えた高級車が走るまちなど。アンバランスな現実をコミカルに、しかし、受け止めなければならない事実を事実として伝えています。

生徒が地域を動かす

続いて行われたトークライブは、生徒会役員を中心とし、山口さん、そうま・かえる新聞から私が参加させていただきました。生徒会から山口さんに「MY LIFE IS MY MESSAGEの活動をするための原動力は何か」、「どんな気持ちで『満月の夕』を歌っているのか」という質問があり、山口さんが一つ一つ丁寧に答えていました。私へも南相馬市の現状についての質問があったほか、

編集部からみなさんのサポートに感謝を
全国のみなさんから、たくさんの愛のあるサポートをいただいて「そうま・かえる新聞」は発行されています。11/1~12/31までのサポートご支援(右記口座への寄付ご入金)は、309,454円です。ご支援、本当にありがとうございます。
そうま・かえる新聞は隔月第3金曜日に発行。
次号は2014年3月21日発行予定です。

そうまかえる新聞
[そうま・かえる新聞]
2014年 1月 第12号
発行元 そうま・かえる新聞編集部
http://soma-kaeru.com
連絡先 そうま・かえる新聞編集部
e-mail somakaeru@yahoo.co.jp

実際に岩手、宮城の被災地を訪れた保護者からは、報道だけでは被災地の状況はなかなか伝わりづらく、その中で子どもたちがどのように活動が続けていけばいいのか、アドバイスを求める場面もありました。最後に山口さんは、「みんなのそれぞれの暮らしを美しいものにしようと思って生きてほしい、そして、未来を創るということは絵に描いた餅のことでなく、今日、この瞬間を一生懸命生きるということを繰り返すこと。そういう人が増えていけば未来は明るくなるということを感じている」というメッセージを送りました。

山口さんのライブも行われ、生徒たちが初めて見る民族楽器ブズーキで「新・相馬盆唄」、学校の昼休みにも流されていた「満月の夕」など4曲が演奏されました。鮭川中の文化祭は、単に生徒が発表をし、それをただ保護者が観に来るというものではありませんでした。生徒が皆で何かができるかを考え、行動を起こし、その力が地域を巻き込み、鮭川村として福島を応援してくれていました。

※文化祭の様子(ダイジェスト版)は、下記のプロジェクトのサイト内の動画一覧から見ることができます。
<http://mylifeismymessage.info/>

「そうま・かえる新聞」はみなさんに寄付のお願いをしています。額の大小は問いません。全額を「そうま・かえる新聞」発行のための経費として使用させていただきます。寄付の際には可能であればメールアドレスなどご連絡先(お名前、ご住所など)をお知らせいただけると幸いです。
●郵便局から振込みの場合
口座/ゆうちょ銀行 記号/18290
番号/30483531
●他銀行から振込みの場合
口座/ゆうちょ銀行 店名/八二八(読みハチニハチ)
店番/828 預金種目/普通口座 口座番号/3048353
口座名/そうまかえる新聞編集部

所在地 〒976-0042 福島県相馬市中村1丁目13-3
モリタミュージック内
編集 相馬市・南相馬市ほか有志
協力 かえる新聞(いわきの子供を守るネットワーク)
<http://kaeru-web.com/>
★記事の転載や転用をご希望の方はそうま・かえる新聞編集部までお問い合わせください。